

第 4 章

19 世紀「工業化社会」の産物としての「オリンピック復興」 -その社会的必要性にみるイギリス産業革命期からの連続性と階級間融和-

大賀 紀代子

目 次

1. 本稿の目的と課題
2. イギリス産業革命期における政治的問題の解決手段としての「古典的知識」の普及
3. 階級間融和としての社会的役割を担った「オリンピック復興」
4. 結語

資料・参考文献一覧

1. 本稿の目的と課題

新型コロナウイルス流行の影響により、2020年において、開催予定であった第32回オリンピック競技大会（2020/東京大会）・東京2020パラリンピック競技大会が、延期となった今、オリンピック・パラリンピックに対する国内の盛り上がりは、不安と動揺のなかで、いささか陰りが見えているように感じられる¹。

2020年東京で開催されるオリンピック・パラリンピックは、「スポーツ競技」の開催を通じ、「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てること」を目的とする社会哲学の下実施される世界的イベントである²。そのなかにおいて、多様な価値観の受容として日本の文化を他国・地域の人々へ紹介するといった交流を促し、また多くの経済活動を通じて、国内外に活気をもたらすよう、さまざまな計画がなされてきた³。会期中の訪日外国人の増加やオリンピック関連のイベントの増加、マスコミによる会場・試合などの放映やSNSを通じた情報発信とそれへの世間の反響などにもみられるように、日本国内のみならず世界が注目する一大イベントになる予定であった。この一大イベントを通じて、スポーツ競技はもちろん、社会的・地域的・文化的・教育的などの多面的な角度から、古代から続く「スポーツの祭典」がとらえられることを意味した。そして、それは「スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである」というIOCの「オリンピック憲章」にも表れている⁴。つまり、単なるスポーツを競い合うだけの場ではなく、開催国となる日本の文化に触れ、それを世界に紹介することで、日本というものを学び理解する機会を提供し、また最新の技術を生かした大会演出、多くの訪日外国人の滞在に対応し得る宿泊施設や駅・道路などのインフラの整備など、「オリンピックの開催」を通じ、その準備期間を含め、「今」の日本を、多角的な面から再構築・再認識する意味合いをもっていたと思われる。

このように、現代においてスポーツ・文化・教育の融合を意味する「近代オリンピック」は、どのような経緯で、今の私達の社会のなかでその意味を確立していったのであろうか。そもそも現在おこなわれているオリンピックは、ヨーロッパ諸国において、工業化社会の進展が著しい19世紀末、フランス人の貴族であるピエール・ド・クーベルタン（Pierre

1 2021年2月現在

2 国際オリンピック委員会『オリンピック憲章（Olympic Charter）』10.

3 東京文化資源会議編（2016）などを参照されたい。

4 国際オリンピック委員会『オリンピック憲章』10.

de Coubertin 以下クーベルタン男爵) によって提唱されたものであった。当時のヨーロッパにおける貴族階級にとって、「古代ギリシア世界」についての理解やその探究は、貴族階級がもつ「教養」そのものであり、男爵の称号を持つ彼は、伝統的な支配的階級である貴族階級⁵がもつ「教養」の重要性という視点をその発想の発端とし、「古代ギリシアオリンピック」の復興という形での「近代オリンピック」の誕生を望んだのである⁶。

彼はイギリスのパブリック・スクールで行われていた体育教育にも強い関心を示した。その背景には、彼が生きていた当時のフランス社会が経験した政治的な混乱があったと考えられている⁷。1870年、普仏戦争によって、第2帝政が崩壊したフランスにおいて、イギリスをはじめとする諸国における工業化の進展とそれにとまなう社会的・政治的な変革の波のなかで、旧来の伝統的な社会構造のより一層の崩壊と、そのなかでおきた政治的視点や人々の価値観の変化が生じた。その変化のなかで、クーベルタン男爵は、イギリスにおける体育教育こそ、母国フランスが必要とする教育であり、その教育を採用することで、イギリス帝国がほころ強靱な軍隊を構成することができると、クーベルタン男爵は確信していたのである⁸。

しかし、クーベルタン男爵に対し、「近代オリンピック」をもって「古代オリンピック」の復興を切望させるに至ったこれらの数々の発想は、互いにその関連性において不明瞭な感がいささか否めない。なぜ、フランス人の貴族であるクーベルタン男爵が、異国となるイギリスの教育制度に、これほどまでの強い称賛を示したのか。また、その教育制度の採用・普及が、どのような関連をもって、「古代ギリシアオリンピック」の復興という発想につながったのか。そして、この「古代ギリシアオリンピック」の復興が、どのような理由で当時のヨーロッパ社会に必要とされたのか。クーベルタン男爵が持った「古代オリンピック」の復興のいう理念に基づき、当時のヨーロッパ社会が「近代オリンピック」の誕生を現実のものとしたその社会的・政治的・思想的理由を、本稿では探っていきたいと思う。

5 本稿において、階級の名称・区分およびそれが指し示す人々の社会的地位および職業等については、基本的に、川島(2003)、河村(2003)および君塚(2011)の階級表記・区分に準じた。

6 村田(2016)205-206。

7 村田(2016)201-202。をはじめ、クーベルタン男爵に対する一般的な理解として、参考文献一覧に記載した著書・論文などで、数多く確認される。

8 ベーリンガー(2019)372-373。クーベルタン男爵が模範としていた当時のイギリス軍隊のなかでも、19世紀半ばにおいて特に陸軍の戦力は弱小であったと理解されている。君塚(2011)98。クーベルタン男爵は、身体的な訓練により強靱な軍隊をつくることをもくろんだのではなく、道徳的・模範的な観点からの教育により、軍隊の強化を図ったと考えられている。村田(2016)202。

2. イギリス産業革命期における政治的問題の解決手段としての「古典的知識」の普及

先に述べたように、クーベルタン男爵は、伝統的な支配階級である貴族にとっての「教養」として、古代ギリシアの歴史を身に着けていた。そして、貴族にとっての「教養」は、古代ギリシアについてのものだけでなく、「古典人文学」全般にわたっていた。

貴族にとって、「教養」として古くからの貴重な知識を学ぶことは、支配階級として「その地域の政治を司る」などの地域を束ねる「長」としての役割を担うにあたる資格のような意味合いをもっていたと思われる。

この古くからヨーロッパにおいて、支配階級であった貴族階級がもっていた古代ギリシアの知識の受容は、あこがれや崇拜という姿勢を保ちながらも、現在においてもなお、イギリスにおいてその様子をうかがい知ることができる。2019年2月、本プロジェクト「オリンピック復興運動における社会文化史的考察」の海外研究の一環として、イギリス・ロンドンの大英博物館での調査を行った。その際、博物館内の「古代ギリシア」のエリアにおいて、紀元前において栄華を誇った古代ギリシアの遺物が数多く展示されていた。そのなかに、「古代オリンピック」の様子がうかがえるものもあった。これらの展示品は、大英帝国により19世紀を中心にギリシアからもってこられ、今なおギリシアがその所有権を主張し、返還をイギリスに要求している遺物も多く存在している。

本プロジェクトにおいて大英博物館での展示を調査していると、ふと、疑問が湧いてきた。「なぜ、大英帝国はこれほどまでに、古代ギリシアの遺物の収集に余念がなかったのか」、「本来ならばギリシアにあるべきこれらの遺物を、現在とは異なり輸送手段も十分ではなかった19世紀に、なぜ、これほどまで多くの遺物を、良い状態を保たせながら、ロンドンに運び入れる必要があったのか」、そして「現在においてもなお、これらの遺物をギリシアに返却することなく、ここ大英博物館に展示しておく必要があるのか」といった疑問である。つまり、大英帝国が、古代ギリシアにこれほどまでに強い関心を示していたことが、いささか不自然に感じ、その熱意の高さから、19世紀を通じて大英帝国の持っていたギリシアへの高い関心の諸要因を知りたいという思いに駆られたほどである。

19世紀において大英帝国によって古代ギリシアの遺物がイギリスに持ち込まれ、大英博物館に展示されるに至った背景には、先に述べたヨーロッパにおいて古くから存在していた貴族階級のもつ古代ギリシアへの強い関心があった。彼らは「教養」として「古典人文学」を学ぶなかで、古代ギリシアへの知識を深め、結果的に古代ギリシアへの強い憧れ

を持つようになっていた。その憧れは、クーベルタン男爵がオリンピックの構想を練っていた時期においても、ヨーロッパ諸国における遺跡についての調査・発掘として表されていた。

1829年、フランスのモレア探検隊によりオリンピアのゼウス神殿が発掘されていたとされているなか、本格的な発掘は、ドイツによって行われることとなった。ドイツ人の考古学者であるエレンスト・クルティウスによって行われた本格的な発掘は、1875年から1881年まで実施され、オリンピアの全遺跡を発掘するに至っている。彼は古代の芸術作品の発掘にも成功し、1890年代を通じてその成果の公表は続いたとされている⁹。

このような遺跡発掘は、クーベルタン男爵だけでなく、当時のヨーロッパの貴族階級に対し、オリンピアへの関心を高める効果を持ったといえよう。

この貴族階級の古代ギリシアへのあこがれは、ルネサンス期以来、ヨーロッパにおける親ギリシア主義（philhellenismus）として「古代ギリシアを自らの文明の揺籃の地として崇拜する」という伝統と深く結びついており、人文主義者が抱いたギリシア熱の所産であった¹⁰。ギリシアが、1821年にオスマン帝国に対抗し1829年に独立を果たすまでの道のりのなかで、「親ギリシア主義」に基づきヨーロッパ諸国によるギリシア独立へのさまざまな支援が行われていた点からも、ヨーロッパ諸国における「古代ギリシア」へのあこがれは、貴族階級にとってすさまじいものであったといえる。

しかし、19世紀前半以前の社会において、この古代ギリシア世界に関する知見・関心の高さは、主として、貴族社会特有のものであったといえる。その知見・関心の高さは、先に述べたように、彼らが古代ギリシアに関して学ぶこと＝「教養」としてとらえていたことと深く関連があると思われる。そして、貴族階級は19世紀においてもなお「教養」として「古典人文学」を学び、そのなかには古代ギリシア語をはじめ、古典ギリシア文学や哲学作品についての学びも含まれていた。それらは、貴族階級が通う学校において、貴族の子弟たちに教育されており、それらの学校において、カリキュラムの中心にギリシア古典の教養の学修が位置していた。19世紀後半においてもその傾向は保たれ、クーベルタン男爵も他の貴族と同様に、彼の通っていたイエズス会の中等学校において、古代ギリシア語やギリシア古典文学を修学していた¹¹。つまり、19世紀においてもなお、古代ギリシアに関する知識は、貴族階級に対し、学校において教育される重要な事柄であり、知っ

9 村田（2016）204-205.：ベーリンガー（2019）342.

10 村田（2016）205-206.：ベーリンガー（2019）343. 他

11 村田（2016）206.

ていて当然ともいうべき、貴族としての常識であったと思われる。

そして、特に19世紀のイギリスにおいて、学校にて古代ギリシアに関する知識を身に着けた彼らは、「古典人文学」を中心とした試験制度によって公職を得ていた。この事実が、当時、工業化の進展するイギリス社会において、大きな政治的問題となっていたのである¹²。その要因として、当時のイギリス社会が、産業革命期を経て、工業化期以前がもつ社会の構造・特性とは大きく異なる社会となってしまったことがあげられよう。18世紀後半から19世紀半ばまでにおきたとされるイギリス産業革命において、中世・近世以来のイギリス社会は大きく変化してしまったのである。

その変化の要因は、資本主義の浸透である。産業革命期における資本家の出現・台頭と同時に、モノづくりの仕組みは大きく変化した。機械の発明・導入とともに、家庭内での家族ぐるみの生産や小さな仕事場での生産は減少し、一方で資本家の経営する工場での大量生産が拡大した。つまり、それまでの昔からの技能を用いて職人たちを主体とするハンドメイドでの生産形態から、機械を用いた生産形態への移行が進んでいったといえる。そして、それと同時に、問屋を必要とするいわゆる問屋制家内工業も縮小していき、工場での労働への移行という経営形態における変化も同時に経験することとなった。この生産形態・経営形態の大きな変革は、旧来の経済活動の様式を変化させるだけにとどまらず、社会そのものをも大きく変えてしまった。その変化の領域は、生活水準、消費構造、人々のライフスタイルそのものであり、それにとともなう貧富の差や階級間の階層的分断によりもたらされたであろう地域および国の支配者層に対する要求・要望とそれに付随する「期待」の違いをも生んだ。この違いは、結果的に、旧来の地域の経済のしくみを崩壊させ、その地域の政治的なしくみをも変えていった。それまでは、地域単位での生産活動が主であったといえるが、工業化の進展にとともない、地域の枠組みを超えて、労働力が移動することが可能となった。その結果、自分の生まれ育った土地から離れ都市などで働くことが可能となったのである。それは、人々の生活を、地域・土地・伝統などに縛られたものから、「賃金」という個々人の労働に対する対価に従うものへと変化させた。そして、この変化は、工業化の進展とともに、加速していった。例えば、工場での勤務においても、「家族ぐるみで雇用され、家族単位で賃金（もしくは稼得 earnings）の支払いをうける」という習慣が、「個人で雇用され、個人の労働に対する対価としての賃金が支払われる」というものへと変化していったことなどに表されるように、「個」が重視される社会へと移り変わっていったのである。この変化は、発明によりもたらされた技術革新により生産方法・生産様式が進

12 清瀧 (2001b) 2.

化し生産形態に変化がもたらされていくことで、新しい雇用のスタイルが生まれ、新しい労働環境が生まれたことによる結果であると考えられる。すなわち、工業化の原動力であった技術革新が、結果的に「個」を主体とする経済社会への移り変わりを導くこととなったといえる。

この産業革命期におきた社会の変化は、中流階級の大きい出現をも結果的にもたらすこととなった。産業革命期以前の社会において、生まれた地域のなかでの、身分・地位により、代々受け継いだ仕事をおこなうというような社会構造が構築されていたが、工業化により「個」を重視する社会へ変化することで、階級によりさらなる分化が進んでいった。そのような経済社会のなかで、商工業などを経済基盤とする中流階級・労働者階級が多数誕生していった。

この中流階級・労働者階級の大きい出現は、それまでの貴族階級を中心としたイギリス政治に変化をもたらした。産業革命が進行する過程においても、イギリス議会は、それ以前と変わらずイギリスにおける土地の大部分を所有していた地主貴族階級により支配されていた。中流階級も納税などのかたちで国家に貢献するようになるなかで、工業都市が多数存在したイギリス北部を中心に、中流階級や労働者階級による政治運動が展開されるようになった。この政治運動は、産業革命期終盤には一層激化したが、「貴族政治家を主体とする議会や政府が国を動かす主導権を握るべき」という考えを持つ当時のホイッグ政権により、結果これらの運動は抑圧されることとなった¹³。

この運動は、選挙権に対する中流階級および労働者階級の議会に対する「要請」が主な動機であったといえる。中世以来、イギリス各地では土地を基準とする財産資格によって、国政に関わる選挙権も被選挙権も規定されてきた。この規定が、産業革命により出現してきた中流階級および労働者階級の国政への参加への大きな障害となっていたのである。そこで、この規定の撤廃・改正を求めて、貴族院との対立のなか、1832年に当時のグレイ政権の下で、第一次選挙法改正の実現が果たされた。その結果、下層中流階級においても選挙権を手にすることが可能となったが、しかし、いまだ土地を基準とした財産資格の採用が継続されたことで、選挙権の付与の範囲は、労働者階級にまで拡大するには至らなかった¹⁴。

産業革命が完了した後も、この選挙権をめぐる階級間の抗争は続き、「労働者階級に選挙権を付与するかどうか」といった選挙権の拡大という改革をはじめとする政策をめぐり、

13 君塚 (2011) 89-90.

14 君塚 (2011) 88.

自由党と保守党が真向から対峙するなかで誕生していった二大政党制の下で、選挙権の改定は議論されていった。そして、1867年、第二次選挙法改正が実現するに至った。その結果、ようやく都市の労働者階級にも選挙権が付与されることになったのである。

第二次選挙法改正により、女性を除き、多くのイギリス国民が、選挙権を保有することになった。この結果、1860年代には、二大政党は全国的に組織されるに至ったと考えられている。1870年には保守党の中央事務局が開設され、地方の各支部が統括されるという仕組みが形成され、この仕組みにより、地方における支持者の確保、立候補者の確保、選挙資金の提唱などをとりまとめることができるようになった。自由党においても、1874年に自由党中央協会を、1877年には全国自由党連盟をつくることで、ロンドンを拠点とし、全国の商工業都市や農村部において、支持者の取り込みや支援団体の動員の組織化を遂行していくことが可能となったのである¹⁵。

そして時期を同じくして、二大政党の党首も、貴族階層出身ではなく、商人層などの他の階級出身者へと変化していった。リヴァプールの貿易商人の息子であった自由党のグラッドストーンと小説家の出身であった保守党の Дизレーリ の出現である。彼らによって、それまで主として貴族階級の声が反映されてきたイギリス議会に、中流階級や労働者階級の意見・要望が反映されるような仕組みへ変化していったといえる。1868年11月の総選挙によって誕生したグラッドストーン自由党政権は、それまでなかなか実現されてこなかった中流階級や労働者階級に要望に従った政策を展開していった¹⁶。そのなかの一つが、官僚の採用に関する制度の変更だったのである¹⁷。

このようにして、それまで各地域の政治を司り、各地域の名士としてその地域を治める地主貴族階級によって、地域を中心に存在していたイギリスが、中流階級や労働者階級まで政治に参加することが可能な世の中に変化したことにより、多くの国民が政治に関与するにふさわしい組織を作り上げ、政治を通じて全国をまとめていったといえる。これにより、農業を主として地域単位で展開されてきた工業化期以前の経済社会とは異なり、特定の土地に縛られることなく、広範囲において多様な労働力・資本が流動化していくなかで展開していった工業化社会に適した政治社会へと変化されていくこととなったのである。つまり、このような視点からは、工業化社会という経済社会は、19世紀後半において、政治的な側面から「国」を単位とするものとなっていったことがうかがえよう。

15 君塚 (2011) 93.

16 君塚 (2011) 94.

17 水田 (2011) 847-873. では、19世紀後半のイギリスにおける官僚制度改革について行政機構の「近代化」を推し進めるために必須の要件であったと述べられている。

クーベルタン男爵が生きた時代は、まさにこの階級間の分離が解消されつつあり、そして地域の名士であった貴族階級が政治の主役ではなく、それ以外の階級もが政治を担い「国」という一つのまとまりのなかで、政治社会・経済社会が構築されていくという現象を、イギリスが経験した時期であった。しかし、この多様な階級間が政治に参加することになった19世紀後半というこの時代の土台をつくった産業革命期において、大きな問題として存在したのが、「知の編成としての学校教育に関わる問題」であったと、清瀧仁志は述べている¹⁸。この学校教育に関する問題には、クーベルタン男爵も深くかかわっていくこととなった。

清瀧によると、18世紀末から19世紀半ばを通じて存在したとされるこの学校教育に関する大きな問題は、主として、産業革命期を通じて台頭してきた「中流階級に対する教育の在り方」というかたちで存在した。それは、「地主貴族階級を主体とする産業革命期以前の政治体制の保持か」、それとも先に述べたような工業化社会という新しい経済社会を背景とした「中流階級・労働者階級の政治参加を認めること」につながる「民主的代表的代表制への移行か」、という2つに政治的観点の対立のなかで生まれたのであったとされる。この2つの相対する政治的な観点と「学校教育」が関連性をもって当時問題視されたその大きな要因の一つが、先に述べた「公職任命」にまるわる制度であった。この頃、産業革命以前のパトロネジな制度から、主として選抜試験によって公職を任命する制度に変わっていった。しかし、この選抜試験は、貴族階級が「教養」として身に着けていた「古典人文学」にまつわる内容が出題されるというものであった。そのため、試験とはいっても貴族階級に有利な内容となっていたのである。その結果、採用に関する制度が変わったにせよ、実質的には貴族階級が公職につくような仕組みになっていたといえる。この事実は、当時のイギリスが、中流階級・労働者階級の出現という経済社会の変化に合わせて、政治・行政・社会の組織変革を行っているなかで、試験という制度を採用することで一見多くの階級に門戸が開かれているような公職が、産業革命期以前と変わらず貴族階級により事実上独占されるように事態になっていることを意味した。そのため、この状況に対し、貴族階級以外に属する人々からの反発が生じていたのである。

このような事態を招いた理由として、清瀧は、当時の階級間における「必要とされる知識」の違いをあげている。先にも述べたように、貴族階級にとって必要な知識は、「古典人文

18 清瀧(2001b)より、理解される。この論文において、階級に関しては、「伝統的支配階級および中流階級」という表記が確認されるが、本稿では、社会的・政治的・思想的・経済(史)的・教育的など多様な視点から「近代オリンピック」という一つの事象を考察することから、広範囲にわたる「イギリス史」という観点より、脚注5のような基準で明記した。

学」であり、古代ギリシアに関する知識であった。しかし、一方で、産業革命によって新たに出現してきた中流階級にとって必要な知識は、工業化と関連のあるものであり、それは産業化にふさわしい実学的知識であった。技術革新に導かれた機械化による生産形態・経営形態の変化なかで誕生した彼らのもつ世界観は、科学技術中心の実証主義的な世界観であった。貴族階級のもつ「過去へのロマン」ではなく、新しいものを生み出す「未来への期待」であったといえる。両階級間の持ち合わせた独自の世界観は、「伝統的な国家体制の維持」と「デモクラシー的代表制の創設」という2つの政治体制を生み出すこととなり、結果、公職採用の際の試験問題にも関与することとなったのである。その際、各階級が必要とする知識の違いが引き金となり、「国民統合」に必要な知識をいかに統一していくか、という問題にイギリスは直面することとなった。つまり、「伝統的な国家体制を維持したい貴族階級」に対し、その政治的に不平等さを感じていた中流階級により「デモクラシー的代表制の創設」が掲げられるなかで、「学校教育で教える内容」がキーとなり、イギリスという「国」を「どういう形で一つの政治体制」に統一していくかという議論が展開することとなったのである。

3. 階級間融和としての社会的役割を担った「オリンピック復興」

前章において、19世紀を通じ工業化していくイギリスが経験した、階級間の知的関心・保有する世界観の違いによる政治的な問題と、それに伴う教育の問題について述べた。発明に基づく技術革新により、さまざまな機械が創られ、それが工場における生産で用いられることで、それ以前の社会とは異なる経済の仕組みが誕生した。その結果、中流階級・労働者階級が大いに出現し、19世紀を通じた工業化の進展とともに、彼らの政治的な関与は増大していったのである。この事実、イギリスという国が産業革命期以前から継続してきた地主貴族階級により地域を単位とした統治ではなく、資本主義の下、各個人がそれぞれ自由に経済活動に参加する世の中の到来を意味した。そして、そこでは「古典人文学」を「教養」として必要とする貴族階級とは違い、中流階級は「実学的知識」を必要としたのであった。この階級間による必要な知識・世界観の異なりが、19世紀前半において、イギリスという「国」に分裂の危機をもたらし、その結果、19世紀後半において「国」そして「国民」を一つにする方法とその方向性に関する議論が行われていたのであった。

このイギリスという「国」の統合における方向性を議論するにあたり、「学校教育」についての問題に強い関心を示した教育者がいた。かの著名なトマス・アーノルド(Thomas Arnold)である。彼は、イギリス産業革命期の真ただ中に生まれ、産業革命期の終焉

と時期をほぼ同じくしてこの世を去った。彼の生涯は、イギリスという国で産業革命がはじまり、モノづくりの仕組みが大きく変化し、それに伴い人々の生活が日々変化していく時期のなかにあったといえる。そのなかで、アーノルドは、国家を分断しかねない階級間の政治的な隔たりに対し、その解決策として、「学校教育」と「国教会の再構築」を掲げたのであった¹⁹。

「学校教育」の改革により「国」を政治的・社会的にまとめるという思想をもつこのアーノルドを、近代オリンピックの提唱者であるクーベルタン男爵は強く支持した。1828年から1842年まで「ラグビー校」の校長を務めた彼は、「実学」を重視する中流階級に対し、貴族階級の「教養」である「古典人文学」を含む教育を行うことで、彼らを貴族階級が保有する価値観に融合させることに成功したのである²⁰。アーノルドは、独自の歴史観を持っていた。そして、その歴史観とは、「進歩史観に基づいた社会発展段階論」を基本とするものであり、発展段階論をローマ史に適用しその視点を19世紀前半のイギリスの社会の分析に応用するものであった。つまり、産業革命期のイギリスが抱える社会的諸問題に対し、その解決の糸口を歴史的解釈に求めるというものである²¹。

アーノルドにとって「国」は「最高で至上の社会」であった。そして、彼はその「最高で至上の社会」である「国」は、有機的な単位として存在すべきであるという見解を示し、産業の急激な発展によってその統一が危機となり、結果国民の統一が分裂していくと唱えた²²。つまり、産業革命によって、イギリスという国のまとまりは消滅しつつあったとアーノルドには見て取れたのである。確かに、従来の産業革命論に従い述べるならば、機械の出現により、例えば手織工などの手工業の担い手は機械にとって代われ、彼らは低賃金で仕事を請け負う「労働者」へと成り下がっていったのである²³。産業革命がおこる以前の社会では、手織工は特殊な技能をもち代々その技能は徒弟制によって受け継がれていた²⁴。しかし、このような「特殊な技能をもつ」手織工は、工業化が進むにつれて変化していった。つまり、機械の発明による生産方法の変化などにより、旧来の地域の経済は変化の様相を

19 清瀧 (2001a)

20 古くより、アーノルドは、「スポーツに初めて教育的価値をもたらした人物」という視点からとらえられてきた。しかし、鈴木 (2020) 74.をはじめ土屋 (2013) 28. など多くの論文で述べられているように、アーノルドに対するそのような理解はすでに否定されている。

21 清瀧 (2001b)

22 清瀧 (2001b) 9.

23 Bythell (1969) : Timmins (1996)

24 *Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers*, Pt.IV.,1840,50.において、旧来からの徒弟制度の継続が難しいことが述べられている。

みせ、従来の地主貴族階級によりまとめられていたその地域独自のコミュニティが、新しく台頭した「資本家」によって、崩されていったのである。すなわち、地域の人々を実質まとめる役割を果たしたのが、旧来からの地主貴族階級ではなく、賃金・稼得によって労働力を束ねる工場主としての資本家であったといえる。この経済の変化により牽引された地域の経済・政治の仕組みは、結果的にその地域の宗教を主体とした「まとまり」を弱らせ、その代わりに、「会社」による「資本家と労働者」という利害関係の下成り立つ「雇用」という概念により、人々を縛ることとなったのである。

このような社会的変化のなか生じた階級間の問題に対し、アーノルドが提示した解決方法が、「貴族階級がうける教育を中流階級もうけることができる環境をつくる」ことであった。産業革命期以前より代々政治を担ってきた貴族階級と同じような基準・知識を有し、それをもっておこなう政治的判断を、工業化期によって増加してきた中流階級の人々ができるのであろうか、という点に対する懸念を、アーノルドは強く抱いていた²⁵。そして、その彼が正しいとする「政治的な基準・知識」は、貴族階級が受けてきた古代ギリシアに関する知識などの「古典人文学」であった。そこで、彼は、この古くから受け継がれてきた政治的な判断を行う際に必要な「教養」である「古典人文学」を、工業化期において政治参加の機会が増加してきた中流階級にも修得させることで、両階級において等しく政治判断に必要な知識を有することが可能となり、階級間の政治的な対立は縮小し、結果、「国家」は一つのまとまりをみせるのではないかと彼は期待したのである。

この階級間の対立を弱めることになる「教養」を、両階級の子息に等しく教育したのが、アーノルドが理事を務めた「ラグビー校 (Rugby School)」であった²⁶。

下記の記述は、「ラグビー校」について、アーノルドが1834年に雑誌“The Quarterly Journal of Education”に寄稿したものである²⁷。

本学は、古くからのグラマースクールであり、ラグビーとその近郊の人々のための教育機関として存在している。本学に無償での子息の入学が許可されるのは、ラグビーに2年以上暮らす者、ラグビーから10マイル以内のウォリックシャー内に住んでいる者、そしてラグビーから5マイル以内のレスターやノーサンプトンに位置する場所に住んでいる者である。両親がラグビー以外の場所に住んでいる生徒は、本学の寄宿舎に住むことになっ

25 清瀧 (2001b) 2-3

26 19世紀前半の「ロンドン・タイムス」においても、アーノルドの活躍をたたえる記事が掲載されていることが確認される。“The Times”, 19 Dec. 1827, 2.

27 Arnold, ‘Rugby School, -Use of The Classics’.

オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察

ており、その場合の学費は一般的な学生と同額である。

上記のようなラグビー周辺に住所がある男子学生は、給費制として扱われるが、ただし給費制の学生数には上限はある。彼ら以外に、給費制ではない男子学生が本学では最大260人在籍することが可能である。

本学では校長1名と一般の教員9名の10名で教育にあたっている。学生は9クラスにわけられ、場合によっては試験的に10クラスにわけられる。初級のクラスが1年生 (first form) となっており、順に、2年生 (second form)、3年生 (third form)、前4年生 (lower remove)、4年生 (fourth form)、後4年生 (upper remove)、前5年生 (lower remove)、5年生 (fifth form)、6年生 (sixth form) となっている。最上級クラスである6年生のクラスはイングランド各地の優れたバブリック・スクールからヒントを得てつくられてため、この最上級のクラスのクオリティーは折り紙付きである。本学の制度は前例がないわけでは決していない。

(中略)

本学では半年を、主として、「語学を学ぶ時間」と「歴史を学ぶ時間」の2つの授業期間にわけている。各時間において、教材とする書籍も異なる。例えば詩人や演説者の作品は基本的に「語学の時間」に学び、歴史学や地理学に関しては主に「歴史の時間」に学ぶ。下記の表は、本学の1年間のスケジュールについて表したものである²⁸。

	古典分野			数学	フランスに関する分野
	語学の時間	聖書の時間	歴史の時間		
1年生	ラテン語文法・ラテン作家精選集	教会の公教要理・新約聖書の要約	"Markham's England Vol. I"	図・足し算・引き算・掛け算・割り算・約分	"Hamel's Exercises" (補助動詞まで)
2年生	ラテン語文法・ラテン作家精選集・エウトロピウス	『ルカによる福音書』(創世記)	"Markham's England Vol. II"	1年生で学んだ内容の復習・3つの定理	"Hamel's Exercises" (補助動詞・動詞の活用・不規則動詞) "Gautier's Geography"
3年生	ギリシア語文法 "Matthiae's Abridgment" "Valpy's Greek Exercise" "Valpy's Greek Delectus" "Florilegium" ラテン語への翻訳	『出エジプト記』 『民数記』 『しし記I・II』 『サムエル記』 『マタイによる福音書』	エウトロピウス 自然地理学 U.K.S	3つの定理の練習問題 分数・集合	"Hamel's Exercises" (2年生の続き) "Elizabeth Les Exile en siberie"

28 原本において、3学年ごとに区切って表が作成されていたため、その様式に準じた。

国府台経済研究 第31巻第1号

	古典分野			数学	フランスに関する分野
	語学の時間	聖書の時間	歴史の時間		
前4年生	ギリシア語文法 "Valpy's Greek Exercise" ギリシアの弱強格詩の法則 ギリシア悲劇作家の弱強格詩入門 "Virgil's Eclogues" (牧歌詩) キケロ作 『老年について』	ギリシア語で書かれた聖書(『マタイによる福音書』) 英語で書かれた聖書のなか にみられる行伝	マルクス・ユニアニウス・ユスティヌスについて クセノポン著『アナバシス』 Markham著『フランスの歴史』 (ヴァロワ朝フィリップ王の前まで)	分数・集合 分数(十進法) 平方根	"Hamel's Exercises" (3年生の続きとい ままでの復習) "Jussies's Jardin des Plantes"
4年生	アイスキュロス 「プロメテウス三部作」 キケロ作 『友情について』	ギリシア語で書かれた聖書のなかの行伝 英語で書かれた聖書(『ヨハネによる福音書』) 旧約聖書にみる歴史	クセノポン著『ヘレニカ』 フロルスの4作品 ギリシアの歴史 "Markham's France" (ヴァロワ朝フィリップ王から) イタリアとドイツの地理(詳しく)	十進法・高度な 足し算・ 引き算・掛け 算・割り算(代 数学)・二項定 理・ユークリッド 作の書籍 I	"Hamel's Exercises"の第2部 (主に、発音に関する統語論) フォンテーヌ作の寓 話
後4年生	ソボクレス作 『ピロクテータース』 アイスキュロス作『慈し みの女神たち』 ホメロス作 『イリアス I・II』 ウェルギリウスの作品 (IV・V) ホラティウス作『カルミ ナ』 キケロの書簡集	ギリシア語で書かれた聖書(『ヨハネによる福音書』) 申命記・聖ペトロについて 讃美歌からの選集	アッリアノスの作品 パテルクルスの作品 ジェイムス・マッキン トッシュ著 『イギリスの歴史』	支払額に関する 方程式 割引 一次方程式 ユークリッド作 の書籍 I (続 き)	英語からフランス語 への翻訳 フォンテーヌ作の寓 話

	古典分野			数学	フランスに関する分野
	語学の時間	聖書の時間	歴史の時間		
前5年生	アイスキュロス作『テー バイ攻めの七将』 ホメロス作『イリアス III・IV』 ウェルギリウスの作品 (VI・VII) キケロの書簡集からの抜 粋 ホメロスの作品	聖ペトロによるテモテへの 書簡およびテトスへの書簡 聖書にみる歴史 (列王記からネヘミヤ記)	アッリアノスの作品 ヘロドトス著『歴史III』 (I,38,61,67,88,116) リウイウス著『ローマ建 国史』(II・III) ヘンリー・ハラム著 "Middle age" (フランス・スペイン・ ギリシア・サラセン人) 自然地理学・政治地理学 (全ヨーロッパ)	交換法則・弁証法・ 2つの未知数を用い た一次方程式 ユークリッドの書籍 III	結語論・慣用句 モリエールの作品を英語 からフランス語に翻訳

オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察

<p>5年生</p>	<p>アイスキュロス作『アガメムノン』 ホメロス作『イリアスIV・V』『オデッセイIX』 デモステネスの演説(レプティネスへの抗弁、アポボス弾劾) ウェルギリウスの作品VIII ホメロスの作品 キケロ「ウェッレス弾劾演説」</p>	<p>コリントの信徒への手紙 "Horae Paulinae" (ウィリアム・ベイリー著)</p>	<p>ヘロドトス・トゥキディデスの著作 リウィウス著作 ヘンリー・ハラム著 "Middle age" 社会情勢</p>	<p>二次方程式 三角法 ユークリッドの書籍VI</p>	<p>ブレイズ・パスカル『パンセ』の英語からフランス語への翻訳</p>
<p>6年生</p>	<p>ウェルギリウス・ホメロスの作品 ギリシアの悲劇作家の作品 デモステネスの演説 キケロ「ウェッレス弾劾演説」 アリストテレスの倫理学</p>	<p>七十人訳聖書における預言者 新約聖書の特徴</p>	<p>トゥキディデス・アッリアノスの著作 タキトゥスの作品 ウィリアム・ラッセル著 "Modern Europe"</p>	<p>ユークリッドの書籍III～VI 一次方程式・二次方程式 三角法 円錐曲線</p>	<p>フランソワ・ギゾー著 『チャールズ1世からチャールズ2世にかけてのイギリス革命史』・『イギリス共和国とクロムエルの歴史』 フランソワ・ミニユエ著 『フランス革命史』</p>

(中略)

端的に言うと、本学ではフランスやイギリスなどの近代史²⁹を教えているが、それ以上に古代ギリシアや古代ローマの歴史の教育に力をいれている。シェイクスピアやミルトンよりもホメロスやウェルギリウスの作品を教材として学ぶ機会が多い。本学のこの方針に対し、多くの人は不合理であると思うであろう。特に支配階級に属していない人々にとっては不合理であるように感じられると思われる。

過去において行われてきた古典教育をいまでも継続すべきであるとは思わない。政治に関わるような教養ある人に対し、単にラテン語やギリシア語ができるようになることを教える教育ではなく、彼らは時代にあった自由で新しい教育をうけなければならないことは明らかである。その場合、フランス語・イタリア語・ドイツ語・英語など、ラテン語やギリシア語以外の言語で書かれた文学作品が、ギリシアやローマの古典文学と同じレベルの

29 現在における「近世史」を指し示すと考えられる。

ものとして考えてもいいのかという問題が新たに生じる。

3～4世紀前にギリシア・ローマ文学について学修・研究していた時代とは異なり、今は他の言語で書かれた文学も、ギリシア・ローマ文学と同様に社会的に認められて存在している。しかし、もしそこで、ギリシア・ローマ古典文学を学ぶことを学校のカリキュラムから除外してしまったならば、今の時代を生きる人々が、自分たちが生きる時代よりも前から存在してきたすばらしい作品およびその研究成果を学ぶことができる機会を奪ってしまうことになってしまうであろう。つまり、1500年時点の学修・研究水準に戻ってしまうことを意味するといえる。現在、古典文学を研究する者はわずかであり、彼らの研究成果が世論に与える影響は、東洋に関する研究成果が私達の世論に与える影響と同じぐらいにわずかであろう。このままでは2～3世代後には、中国・インド研究と同様にギリシア・ローマ古典文学についての研究を行う者はほとんどいなくなると思われる。このことは、とてつもない後悔を生むことになるであろう。その結果、私達がアジアの精神に対し共感しにくいように、私達ヨーロッパ人共通の精神的つながりを感じにくくなるであろう。しかし、古代ギリシア・古代ローマの精神は私達の社会のいたるところに存在しており、また私達の精神自体のなかにも存在し、私達はそれを今日まで発展・成熟させてきた。

古代ギリシアや古代ローマには、蒸気機関も、印刷機も、コンパスも、望遠鏡も、顕微鏡も、火薬も存在しなかった。私達が使う物や、喜びを感じたりする事象、という点においては、現代を生きる私達と古代ギリシア人と古代ローマ人とでは大きく異なるが、しかし、現在、私達の道徳的かつ政治的な視点や人格を形成する事柄の中には、その精神が確かに存在している。アリストテレス・プラトン・キケロ・タキトゥスは、決して古代の人物ではないのである。事実上、彼らは私達と一緒に同じ時・同じ空間を生きているのである。

(中略)

過去に対する見識がなくては、現在に対する見識や将来に対する見識が不十分なものになってしまうため、過去を学ぶことは今を生きる私達にとってとても価値がある。もし、過去を学ぶことを制限してしまうと、私達の社会に対する認識が曖昧になり、さらには誤った理解が生じることになり、現在や将来を正しく考えることができなくなってしまうであろう。

(中略)

ギリシア古典文学やローマ古典文学を翻訳することは、生徒たちにとって生徒たち自身の言語を理解するのに非常に効果的である。

(中略)

上記で述べたように、本校では、現代のヨーロッパについての学修もカリキュラムのな

オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察

かに組み込んでいる。ペロポネソス戦争についての知識がある生徒は、フリードリヒ2世やナポレオン1世の政治や戦争について理解しやすいであろう。生徒たちが想像するよりも、現代の出来事は古代の出来事と深くつながっているのである。この事実を、本校では生徒たちに教えたいと強く思っている。

この記述から、「ラグビー校」ではラグビー周辺に在住する生徒の入学を優遇していたことがうかがえる。「ラグビー校」は、ウォリックシャーに位置する学校であり、記述にもあるように古くからパブリック・スクールとして存在していた。つまり、古くからラテン語などをはじめ古典文学の教育を行う学校であったことが見てとれる。また、カリキュラムが示しているように、古代ギリシア・古代ローマの代表的な古典文学を教科書として用いることで語学を学び、宗教の学修においてもギリシア語で書かれたものを教科書としていることがうかがえる。低学年では、ギリシア語やラテン語の文法の基礎的なことを修得し、その後、学年が上がるにつれてより本格的な書物の読解をおこなう構成となっていることがわかる。さらに、「ラグビー校」では、高学年になると、歴史の時間において、古典的書物を用いた学修だけでなく、ヘンリー・ハラムの著作やウィリアム・ラッセルの歴史書など、同時代の研究者の著作を用いて歴史を学んでいることが読みとれる。また、書物を用いた学修に加え、「世界情勢」といった現代の社会・世界を題材にした授業も行われていることがわかる。このことは、アーノルドが、上記の記述において「歴史が現代の社会と深くつながっていることを生徒たちに伝えたい」と強く主張している点との関連がうかがえる。つまり、ただ古典的な書物を用いて歴史を学ぶだけでなく、ある程度の歴史の知識がついてきたら、今後は現代に視点を動かし、現代から過去を鑑みることで、過去と現代のつながりを理解する能力を培うのである。すなわち、「過去は過去」「今は今」として存在するのではなく、過去が今の社会をつくるきっかけ・土台を形成していることを理解することで、現代の社会をより深く理解することが可能となるのである。この見方は、「古代ギリシア・古代ローマの精神が現代の私たちの社会・道徳・政治・人格形成などに影響を与えている」というアーノルドのヨーロッパ社会に対する把握の表れであると考えられる。

このような視点により、「現代の世の中」を「古典人文学」を用いながら把握するというカリキュラムをもつ「ラグビー校」は、貴族階級・中流階級の子弟に対し、同じような内容の教育を受けさせる機関として機能した。そして、その教育をうけた両階級の子弟たちは、将来、イギリスという国の政治に関与していくのである。そのような彼らに対し、アーノルドはいままでの古典の研究成果をふまえ、新しい古典の解釈を教えたのである。それ

は、上記の彼の記述からも確認できるように、何百年前に行われていた古典の解釈・理解を教えるのではなく、現代において明らかとされている古典の解釈・理解を生徒に教え、生徒たちは現代を分析するために「古典人文学」を学ぶということである。つまり、古くからパブリック・スクールで教授されていた内容ではなく、次の時代を担う彼らが正しく社会を理解し、そして適切な政治的判断ができるように、彼らに対しリニューアルされた古典の解釈・理解を教授することで、今の時代にあった適切な歴史の把握とそれを用いた現代社会の理解が可能となることを「ラグビー校」での教育という実践的な機会を通じて、アーノルドは社会に示したのであった。

このようなアーノルドの「古典人文学」教育に対する見方や、階級間の垣根をこえて同じカリキュラムで貴族階級・中流階級に教育を行うという理念を、クーベルタン男爵は称賛していた。アーノルドに対し、彼は、下記のように述べている。

教育の原理そのものをアーノルドは生み出し、そして実践した。

貧富の差に関わらず、イギリスのすべての人々の子供の育て方を大きく変えた³⁰。

つまり、クーベルタン男爵にとって、アーノルドが提示する教育は、理想そのものであったといえる。その理由として、19世紀後半のヨーロッパ諸国が抱えていた階級間の経済的・社会的立場の違いが、一国の政治的な問題にまで拡大している状況に対し、クーベルタン男爵自身が、非常に高い関心を示していたことがあげられる³¹。

先に述べたように、アーノルドは18世紀後半から19世紀前半におこったとされるイギリス産業革命の結果誕生した、貴族階級とそれ以外の階級との間に生じた政治参加にまつわる問題の解決策として「学校教育」を提唱し、そこにおいて「従来、貴族階級の子弟に対し教育されてきた「古典人文学」を、中流階級の子弟にも教えることで、政治に関与する際に必要となる知識の受容において、階級間の大きな差異がなくなる」と説いたのであった。そして、その「古典人文学」の教授には、「単に、古くから世紀を超えておこなわれてきた「古典人文学」を教えるのではなく、その時代における世界・社会状況やその時代に書かれた書物を用いてその時代の経済社会・政治社会の状況を把握した上で、「古典人文学」をその理解を深めるツールとして役立つ」という方法を採用した。つまり、産業革命期というめまぐるしく変化する経済社会のなかにおいて深刻化する階級間の格差に

30 MacAloon (2008) 60.

31 MacAloon (2008) 70.

対し、その解決をもたらす新しい政治社会がもとめられるなかで、階級間の垣根を越えてイギリスという国をひとつにまとめていく「何か」が、同時代の人々にとって必要であったのであり、それを、アーノルドは、「教育」という角度から提案したといえる。そして、時代を超え、19世紀後半、産業革命期の完了の結果確立した資本主義を基礎にした「新しい社会」において、貴族階級・中流階級・労働者階級といった階級ごとの隔たりは深刻化するとともに、各階級のもとめる政治的要求の違いも大きくなっていった。それと同時に、各階級の政治的参加度は拡大し、中流階級だけでなく、労働者階級においても、彼らの政治参加への要求の拡大や資本家に対する彼らの組織化という傾向は強まりを見せていった。

このような社会に対し、クーベルタン男爵は「解決策としての古典的博覧会」を提案したのである。言い換えると、アーノルドが「教育」という観点から「古代ギリシア・古代ローマ社会」の知識を階級の垣根を越えて受容させることで政治的な問題を解決しようと試みたように、クーベルタン男爵も古代文明社会の伝統を用いて本国フランスの、ひいては当時の工業化したヨーロッパ諸国が抱える社会問題の解決を試みようとしたといえる。すなわち、貴族階級の「教養」であった「古典人文学」を他の階級にも教授することで、分断しかねない当時のイギリス社会を一つにまとめ国民統合を進める手段とすることを目指したアーノルドの教育論にクーベルタン男爵が強く感銘をうけた点に表れているように、19世紀末においてヨーロッパ諸国で広く浸透しつつあった「スポーツ」というものを、各階級共通の言語として用いることで、資本主義により中流階級・労働者階級の政治的な関与が大きくなり社会的台頭が顕著になり旧来の社会構造が崩れ始めたヨーロッパ社会を、一つにまとめ、国を、そして国民を、統合しようとしたと考えられる。つまり、その手段として彼が着眼したのが「古代ギリシアオリンピック」であり、19世紀末という当時の現代におけるその復興という着想をえたといえる。

当時、ヨーロッパ諸国において「スポーツ」は、そのやり方や社会的な容認・認知の度合いに差はあるにしても、階級を問わず広く行われるものとなっていた³²。例えば、イギリスにおいて、スポーツは、古くから貴族階級の男性によっておこなわれるものである

32 ベーリンガー（2019）296-310 317-319. 陸上競技においても「商業化」が確認されており、剣術についてもドメニコ・アンジェロがロンドンにおいて教則本の出版で大成功を収めるなどの事例が存在する。また、ボクシングにおいては、ダニエル・メンドーサがボクシングの知性化に貢献したとして、富裕層の購入するウェッジウッドの陶器の絵柄に採用されたという事例がある。このことは、スポーツ選手としてのボクシング選手が階級を問わず受け入れられていることを意味する出来事であると考えられる。

とされてきたが、18世紀には、スポーツが中流階級・労働者階級の間において「商業化」する形で広く普及していった。その中心はボクシングであったとされる。ボクシングは国民的な人気を誇っていた。ボクシングの技術に関する書籍が出版され、さらには、娯楽業界の経営者や格闘技学校の所有者などによって「大衆スポーツ」として宣伝用パンフレットにその手引きが紹介されていたほどであった。その上、中流階級もボクシングに大きな関心をしめしており、彼らは命にかかわる剣やピストルを用いた決闘の代わりにボクシングで名誉をかけた戦いを行うこともあったため、ボクシングの講習をうけることもあったようである。また、月刊誌『スポーティング・マガジン』において、最新のボクシング試合の様子が掲載され、ボクシングの起源や歴史が特集されたことから、ボクシングが広くイギリス国民の目にするものとなっていたことがうかがえる。

このボクシングに関する特集をおこなった月刊誌『スポーティング・マガジン』は、1792年にロンドンで創刊された。最初のスポーツ専門誌と考えられるこの雑誌では、貴族が行うスポーツだけでなく、あらゆるスポーツについての記事を掲載していた。それは、その歴史、競技規則、試合の機会、重要なスポーツ選手などである。さらに、時事的な出来事についての記事も掲載され、また「これらか観戦できるスポーツイベントの案内」として「マンスリー・カレンダー」も付属されていた。これにより、クリケットの試合、アーチェリーの試合などのさまざまな競技の案内が読者に提供されており、スポーツ競技の普及・宣伝に大きな役割を果たしていたと言えよう。そして、何より、この雑誌では、スポーツそのものの歴史についての特集が組まれていた。1792年11月発行の第2号では「古代オリンピック」に関する記事が掲載されており、同年12月発行の第3号では、「エリザベス1世時代のスポーツ」に関する記事が確認される³³。つまり、この雑誌では、スポーツを歴史的な側面と現在の様子の両面から扱っていることがうかがえる。すなわち、スポーツ競技を、「過去のもと」と「現代のもの」として互いを関連性のないものとして認識するのではなく、読者に対し「過去のスポーツ競技」と「現代のスポーツ競技」双方を包括的に理解し認識してもらえるような構成をとっているといえる。言い換えるならば、「スポーツ競技」においても、過去と現代が互いに関連しあっており、現代のスポーツ競技のなかにおいても、過去の要素が存在しているなど、現在のスポーツ競技を把握するにあたり、過去を振り返りながら「スポーツ」というものを理解するという視点からこの雑誌は創られていると理解できよう。そして、そこには「古代オリンピック」に関する記事があったことからわかるように、編集者および読者にとって、「古代オリンピック」は18世紀終

33 ベーリンガー (2019) 310-312.

盤のスポーツを理解する上で知っておくべき興味のある題材であったのであった。つまり、当時の人々によって、「古代オリンピック」は広く知られた存在であったと思われる³⁴。

このようなスポーツの「商業化」の波は、19世紀を通じて、イギリス国内で拡大していき、19世紀中葉には、労働者階級への「余暇」という概念の浸透とともに、スポーツの観戦の人気により拍車がかかることとなった。

この動きは、他国でもみられた。19世紀後半において、激しい経済成長をみせていたアメリカにおいても、野球がすでに国民的な人気を誇っていたと考えられている。また、カナダからアメリカに伝わったとされるアイススケートやホッケーもすでに国内に広まっていった。さらに、ネイティブアメリカン発祥と考えられているラクロスもこの頃その社会的認知の広まりを見せていた。しかし、「勝敗をめぐる賭けをする」スポーツとして、すべての階級の間で人気を博したのが、イギリス同様、ボクシングであった。そして、スポーツ関連の団体も数多くこの時期には創られている³⁵。

つまり、産業革命期を経て、その後深みを増していった工業化社会は、19世紀後半のスポーツ競技においてもその「商業化」を促していたといえる。その結果、当時の中流階級・労働者階級の政治的な台頭や組織化により、旧来の伝統的政治体制の変化が顕著になってきた当時のイギリスにおいて、階級間の隔たりを超え、階級間の共通した「言語」としての機能を果たすことが可能であったのではないだろうか。すなわち、階級といった経済社会・政治社会における「枠組み」とらわれず皆で夢中になれるもの、それがスポーツ競技であり、それは産業革命期を経て誕生した新しい価値観のなかで形成されたのである。言い換えるならば、産業革命によって誕生した経済社会がもたらした利益を追求する自由なビジネス環境・制度が、スポーツ競技という文化を、さまざまな媒体・手段を通じた多様な形でもって「商品」としたことで、結果、スポーツ競技は国・地域を超えた「文化」としての立場を確立したのではないだろうか。そして、その「文化」としての確立は、イギリスの「ヴィクトリア繁栄期」をはじめ、19世紀後半の大英帝国の経済活動の活発化によって、より一層、国をこえて広がりをもせたと思われる。つまり、産業革命により進展した工業化が結果的にもたらした資本主義の拡張が、イギリスの経済的・政治的な世界

34 近代オリンピックがはじまる以前の1850年、イギリスにおいて、地域を単位としたオリンピックの名の付くスポーツ競技大会が誕生していた。今でもその名を残すのが「ウェンロック・オリンピック (Wenlock Olympian Games)」である。シュロップシャーにあるマッチ・ウェンロックで行われてきたこのスポーツ競技では、労働者に対する教育を目的の一つとしており、彼らも競技に参加していた。Beale (2011) 26.

35 MacAloon (2008) 143-144.

進出により地域・国をこえて、「文化」としてのスポーツ競技を普及させていった可能は高いと思われる。

そして、イギリス・アメリカにおいてもボクシングが階級問わず国民に受け入れられていたことからわかるように、古代ギリシアにおいてもおこなわれてた種目が、19世紀後半においても人気を博していたことは、古代ギリシアのスポーツ競技が、時空を超えて、存続していたことを意味しよう。クーベルタンは、ボクシングをはじめとする競技がおこなわれていた「古代オリンピック」の復興を、当時のフランス社会問題の解決手段として用いることで、階級間における問題やそれにより派生した「国民を一つのまとめる」というフランスが抱えた政治社会的問題を超え、結果的には、当時のイギリスを中心とする世界的経済社会のなかで、地域・国を超えた経済的・政治的・文化的つながりの一層の浸透をうながすとともに、国の枠を超えた「世界」を一つとする発想を構築していったのではないだろうか。

そして、その「世界」は、共通の言語である「スポーツ競技」を用いて、「古代オリンピック」における「都市国家」のような立場を担う19世紀末当時のイギリス・フランスといった「国・地域」の国民によって、階級・社会的地位・職業・政治的わだかまりなどといった「経済社会・政治社会により規定されたもの」を取り除き、「人間」としての公平な立場で競い合うことを「近代オリンピック」としてクーベルタン男爵は提唱したといえる。そこでは、古代ギリシア都市が、「古代オリンピック」の期間中は「休戦」したように、工業化社会のなかで新たに生まれた「競争」・「戦い」によりもたらされた「階級間のわだかまり・政治的軋轢」・「資本家と労働者間の労使問題」・「本国と植民地」といった19世紀末における「戦い」を、「休戦」とし、共通の言語である「スポーツ競技」という古代からの「文化」を共有したのであった。つまり、イギリス産業革命によって誕生した「経済社会」が結果的にもたらした産物であるといえよう。すなわち、工業化社会における産物、それが「古代オリンピックの復興」、すなわち「近代オリンピック」ではないだろうか。

4. 結語

以上、19世紀前半の工業化社会が持つ経済社会的・政治社会的問題から、「近代オリンピックの誕生」を考察した。18世紀後半より始まったイギリス産業革命が作り上げた新しい経済の構造は、工業化社会を誕生させ、その結果産業革命以前の社会の在り方を否定した。それは、中流階級・労働者階級の政治参加の機会を増大させ、結果的に貴族階級の支配による社会の在り方に対しその変容を促した。それと同時に、各階級の必要とする「知

識」・「教養」および「政治に対する期待・要求」の別を生み出したのであった。中流階級は「技術革新・産業化に有用な実学」を必要とし、それをもって産業資本家といった工業化の立役者として機能することで、政治の舞台での発言力を増していった。一方、貴族階級は産業革命期以前より政治をおこなう上で「教養」とされた「古典人文学」を必要とし、地主貴族らを中心に一国の経済に及ぼす影響力の高さを保持するとともに、それにより政治に及ぼす影響の強大さをも有していた。さらに、労働者階級は自らの労働環境や処遇の改善を求めて団結し組織化することで、国政を動かすまでに至っていた。つまり、各階級が、各々の立場から、政治を動かす力を持ち始めていたのであった。

この各階級の保有する世界の差異は、彼らを経済的・政治的・思想的・文化的など多様な面で大きく分断させ、一国の国民の統合を分化させる力として働き始めていた。この状況に対し、国民を一つにまとめ、階級の融和を図る目的で用いられたのが「教育」であった。そしてそれは、古代ギリシア・古代ローマにまつわるものであり、貴族階級が「政治という立場から社会を動かす際に知っておくべき教養」である「古典人文学」であった。つまり、産業革命期以前では一部の人々にのみが知ることができた「知識」が、産業革命によりそれ以前の社会が崩壊していったことで、多くの人々に普及することとなったといえる。

この普及に貢献したのが、アーノルドが提唱した「ラグビー校」で実践された教育カリキュラムであった。そしてそれは、産業革命期以前より教えられていた「古典人文学」を、産業革命を経験した社会に適應するよう、当時の文学や世界情勢などをふまえながら、「今」を理解する手段としても用いるというものであった。つまり、産業革命期以前より社会を動かす立場の者に必要とされてきた知識を、その時代に合わせて、多くの人に普及させるということであり、それは、先に述べたように、当時のイギリス社会において各階級が互いに固有の立場・視点から政治に関与していたことの表れであるといえよう。すなわち、工業化によってもたらされた新しい社会のしくみが必要とした、各階級の政治参加を可能とするための知識の共有であったといえる。

この知識の共有の必要性は、産業革命期以前より存在する旧来からのイギリス社会のなかに古代ギリシア・古代ローマの要素を含んでいることの表れであり、またその伝統がイギリスの経済・政治・思想などさまざまなところに存続し、イギリス固有の文化・社会を形成させていたことと深く関連する。そして、この関連性は、旧来より「古代ギリシア」・「古代ローマ」に関する知識を教授された一部の人々により、長らくイギリスの政治がおこなわれていたことと深く結びつく。つまり、「古代ギリシア」・「古代ローマ」に関することを基礎知識として持ちながら政治をおこない社会を作ってきたイギリスにおいて、産業革命という経済社会の変化の結果到来した多くの人々が政治に関与する時代において、その

知識の一般に対する普及の必要性がうまれたということである。言い換えるならば、政治に参加する人々の増加が、知識の普及の必要性をもたらし、結果、その普及方法としての「学校」の必要性をもたらしたのである³⁶。いわゆる大衆社会に対する「知」の普及である³⁷。

このような各階級の政治参加に関する問題およびそれから派生した「国を一つにしていくな方法や方向性を模索する動き」は、イギリス産業革命に牽引されることで工業化社会が到来した他のヨーロッパの国々においても、同様に発生した。「工業化によって新しく誕生した社会のなかにどのようにしてその国を成り立たせてきた旧来からの伝統的な社会的・文化的要素を存続させていくのか」という大きな課題を、各国は背負うこととなったといえる。

この大きな課題に対し、工業化によって各国の「共通言語」となった「スポーツ競技」を用いて、古代ギリシアでおこなわれていた「古代オリンピック」を「近代オリンピック」として現代に復興させることで、ヨーロッパで旧来より「政治を担うことで社会を動かす人々」がもっていた古代ギリシアに関する一知識を、階級を問わず多くの人々に普及させることを、クーベルタン男爵は提唱したのであった。そして、その一知識をもって、「古代ギリシア人」の理念・価値観・世界観といったエトスなる知識を、多くの人々に伝えたのであった。そして、その「古代ギリシア人」の理念・価値観・世界観といった知識は、旧来よりヨーロッパ社会を作り上げ、19世紀末時点のヨーロッパ社会においてもなお当時のヨーロッパ社会・文化を構成する重要な要素であり、それを「近代オリンピック」を通じて多くの人々が学びとることで、「学校」での「古典人文学」教育とは異なる方法で、社会を動かし文化を創り出すのに必要なエトスなる知識を普及させることを可能としたのであった。これが、クーベルタン男爵がもたらした「近代オリンピック」の社会文化的価値であると考えられる。

このように、「古典人文学」という知識の普及が当時の社会問題の解決の糸口となった19世紀において、「古典人文学」的知識は、階級を超えて普及していたことが、以下のよう
に実例をもって証明される。

先に述べたように、イギリス産業革命の特徴の一つとして、綿業における機械制生産の導入により大量の綿製品の生産が可能となったことがあげられる。工場での機械を用いた

36 アーノルドの活躍後、イギリスにおいて中流階級の子弟も入学することが可能なパブリック・スクールの設立が相次いだ。川島 (2003) 189-190。

37 労働者階級に対する教育の普及は進んでいった。1880年には、就学の強制が実施され、1891年に義務教育（初等教育）の無償化がおこなわれるなど、19世紀後半においてイギリスにおける公教育制度は大きく発展していった。河村 (2003) 219。

生産が普及するなかで、産業革命期以前より、従来の伝統的な手法によって布を織る仕事を担っていた「手織工」とよばれる人々がいた。彼らは、産業革命の進展のなかで、仕事を機械にとって代わられることになり、低賃金のなかでの生活を余儀なくされたと考えられてきた。しかし、「手織工」のなかには、自らの子弟を学校に通わせ、「読み・書き・算術」などの他、簿記、会計などの科目に加え、幾何学やラテン語などの知識を彼らに修得させていた者もいた³⁸。この事実は、「手織工」という一庶民であり大衆に属する人々であっても、古典に触れる機会があったことを意味しよう。

ジョン・マカルーンによると、クーベルタン男爵は、「近代オリンピックの」の誕生をもたらした自由放任主義を土台としたとされる当時の「経済社会」を、肯定的にはとらえていなかったと考えられている³⁹。彼は、産業革命期以来の経済に牽引されてきた19世紀の社会構造の変化に対し、「不公正な状態」という無秩序さを感じ取っていたと理解されている。それは、旧来の社会がもっていた地域を単位とした「共同体」的なものとは異なり、実際にクーベルタン男爵の目に映ったであろう当時の社会の様子に示すような「賃金」というものを媒介にして新たにうみだされた社会的立場・役割の理不尽さであった。そこには、産業革命期以前の社会が持っていた地主貴族階級を「長」とした地域の秩序にもとづいた政治社会にある「規律」ではなく、無慈悲に低賃金で働かざるを得ない労働者や路上での生活者の存在などが示す「競争」の結果生まれた「社会的な無秩序」であった。このような状態に対し、クーベルタン男爵は、19世紀において段階的におきていた政治における民主化だけでなく、国民の「精神」の民主化が必要であると述べている⁴⁰。この国民の「精神」の民主化に対し、社会を動かし文化を創り出すのに必要な知識として、産業革命期以前からヨーロッパ社会に存在したとされる「古代ギリシア人」の理念・価値観・世界観といったエトスなる知識の普及およびその結果の共有を、「近代オリンピック」を通じて行うことで、国民の「精神」の民主化を図ったのではないだろうか。

クーベルタン男爵の生きた時代、中流階級・労働者階級だけでなく、貴族階級においても、

38 *Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers*, Pt.IV.,1840,96-116.

39 しかし、マカルーンは、クーベルタン男爵は社会主義や共産主義を支持したわけでは決してないと理解している。この点においては、現在のオリンピック・パラリンピックが「オリンピック・ムーブメントにおけるスポーツ団体は、スポーツが社会の枠組みの中で営まれることを理解し、政治的に中立でなければならない。」という条項を、オリンピック憲章に盛り込んでいることなどにも表れているように、オリンピック・パラリンピックの政治的中立性という性格につながっている可能性がうかがえよう。国際オリンピック委員会『オリンピック憲章』10.

40 MacAloon (2008) 70-71.

当時の社会における経済成長に寄与していたとし、経済成長の拡大は「工業化」の中心を担った中流階・労働者階級をのみだけではなく、金融・サービス部門などにおいて活躍したジェントリー階級の人々によっても大きく飛躍したとも理解されている⁴¹。つまり、さまざまな階級により、19世紀イギリスの経済成長・発展は形成されたとも言えよう。すなわち、一国における経済成長という側面においては、その立場の違いはあるにしても、すべての階級が経済活動に参加し、その成長拡大のために貢献していたことになる。つまり、すべての階級が、当時のイギリス経済のプレイヤーなのである。

そのようななか、1880年代頃には、19世紀の「工業化社会」の象徴ともいべき当時の「万国博覧会」に対しては、その政治的傾向や技術力により生み出された工業製品などのモノに大きく注目が当たるなどといった理由から数々の批判がおきていたと、マカルーンは述べている⁴²。「工業化社会」における産業・科学技術とその成果を展示する催しとしての性格をもったとされる「万国博覧会」は、同時に、世界平和への貢献・広く一般大衆に対する教育・啓蒙的役割・商業と貿易の促進・進歩とより良い未来というイメージの提供、の4つのテーマを有していたと考えられている⁴³。「万国博覧会」に対する当時の多くの見解が、マカルーンの述べるものと一致しているとするならば、創り手である「人（ヒト）」そのものへの焦点の当て方が不十分であったことが、「万国博覧会」を階級融和の有効な手段として、社会が、そしてクーベルタン男爵が、認知しにくかった点ではないだろうか⁴⁴。確かに教育的効果を「万国博覧会」は有したとされる。階級に関わらず、すべての階級の生活に必要なものを展示したとされることで、労働者階級の社会的適合や、展示される商品を観覧することにより、伝統的な技能・最先端の技術を目の当たりにすることが可能となった。つまり、すべての階級において、自国および他国が保有する伝統的かつ最新の「技能・技術」を、「万国博覧会」という場を通じて、視覚的に共有することが可能となったのである。

「万国博覧会」で展示された品々をうみだした数々の技能・技術は、産業革命期以前により保有されていたものもあれば、一方で、産業革命期に「発明」によりうみだされたも

41 Cain and Hopkins (1993)

42 MacAloon (2008) 149-151.

43 1851年の第1回ロンドン博覧会から第二次世界大戦開戦に至るまでの期間において、この4つのテーマが共有されていたと、重富は述べている。重富(2011)12.

44 近年では、第1回ロンドン万国博覧会「万国博覧会」に対して、「社会的秩序と階級統合の象徴」というイメージではなく、「階級・地域・職業・人種・性差といった深い社会的亀裂を露呈させる催しであった」という立場からの理解もなされている。重富(2012)43-44.など

の、あるいはそれ以降に生み出されたものもあった。つまり、19世紀およびそれ以前の人々の生活のなかで誕生し、改良されたものである。「工業化」を支えた数々の最新技術は、古代からの知識の上に各時代の知識が積み重なり、そして新しいものへと書き換えられることで、いままでの世の中にはない新しい「モノ」の誕生をもたらした。つまり、古代からの知識面での連続性がそこには存在する。そして、これを可能にしたのは、イギリス産業革命期にみられた「情報としての知識の一般への普及の機会の増加」であると、ジョエル・モキアは考える。それまでは、ラテン語で書かれていた多くの技術書が、産業革命を通じて、各地域の言語で書かれるようになったことで、それまで一部の社会的上層部に位置する人々のみが有することができた「知識=情報」が、広く多くの人々に知れ渡りようになったのである。「百科全書」などの作成・販売により、多くの人々に多様な技術に関する情報は広まるとともに、「絵」によりそれを伝える書籍等も、その普及に大きく貢献するに至ったと、彼は述べている⁴⁵。つまり、産業革命期を契機として起きた「知識=情報」の普及の拡大という現象が、多くの人々に知識との出会いの場を与え、それをもってその有用な活用がおこなわれたのである。その結果、「工業化社会」を支えた技術革新がもたらされることになったのであった。つまり、「知識=情報」の普及が、産業革命を、そして工業化をもたらしたということである。

そして、その「知識=情報」は、先に述べたように、古代より人々によって継承され、改良され、ときには古くからの知識がヒントとなり、全く新しい「真理」の誕生へとつながったりと、そこには人類が生きてきた「歴史」の長さの分だけ「知識」が存在した。そして、それを新しい時代に合わせ、その時代が必要とするものに変えていく「熱意」をもった人々が、そこには同時に存在したのであった。

このことは、産業革命期を経て誕生した「工業化社会」という旧来とは異なる新しい社会のなかで、世紀転換時期に差し掛かる19世紀末に、「オリンピック復興」が試みられたことと、リンクする。すなわち、「工業化」を支えた「知識」が、古代からの継承・改良をともない時代を超えて伝えられ、それが19世紀の「工業化」という新しい経済的フェーズを生み出した。そこでは、すべての階級が経済のプレイヤーとして存在していた。そして、それが土台となりうみだされた「工業化社会」は、それ以前の社会の構造とは相容れないものとなり、数々の社会的問題が発生した。その大きな一つとして、「階級間の政治的な要求・要請」の違いにより発生した「伝統的な政治体制の維持か」それとも「新しい政治体制の誕生か」という階級を基にした国家分裂の危機をもたらしかねない状況が発生

45 Mokyry (2002)

したのであった。そこで、社会に求められたのが「階級間の融和の必要性」であった。産業革命期以前の社会において政治に関与していた貴族階級のみが有していた「古典人文学」の知識を広く他の階級にも広め、すべての階級が政治参加をする場合に共有すべき「知識＝情報」としたのであった。そしてそれは、19世紀のイギリス・フランスなどの国々には、その文化的・社会的・思想的などさまざま点に、古代ギリシア・古代ローマの影響がうかがえることに起因していた。そこには自分たちの社会における共通の「知識」としての古代ギリシア・古代ローマが存在したのである。クーベルタン男爵は、その「知識」の共有として、「古代オリンピックの復興」つまり、「近代オリンピック」を提唱したといえる。すなわち、「知識」の普及によりもたらされた「工業化」は、古くからの「知識」である「古典人文学」の知識の普及を必要とする「工業化社会」を生み出す事になったといえる。

2020年現在、「工業化社会」は終焉を迎え、次の新しいフェーズへと移行している。つまり、「脱工業化時代」の渦中にある⁴⁶。これは、18世紀後半から19世紀前半のイギリスの人々が「前工業化社会」から「工業化社会」への移行を経験したと類似する現象であろう。つまり、経済的・政治的・文化的・社会的・思想的・教育的など、数多くの多様な面からの変化が生じる過程に、私達は生きているのである。

「工業化社会」の産物として誕生した「近代オリンピック」は、次におとずれるであろう「新たな社会」に、どのような立場で、どのような意味を持つのか、その答えを知ることが非常に楽しみである。19世紀に「近代オリンピックの誕生」が担ったのと同様に、「新しい社会」への移行期・過渡期である「今」において、「工業化社会」から「新しい社会」への移り変わりのなかで「経済」の変化により生み出される数々の社会的諸問題の解決の糸口としての役割を、オリンピック・パラリンピックが担ってくれることを期待してやまない。

そして、「産業的」な意味合いをもとに誕生した「万国博覧会」における「知識としての情報」の普及と、「経済」の変化のなか生じた「社会を一つにまとめる知識の普及」であるオリンピック・パラリンピックとが、互いが互いを補うことで19世紀において「工業化社会」という新しい社会を両者が支えたように、21世紀における「新しい社会」への移行のなかでオリンピック・パラリンピックが担うであろう役割もまた、経済・産業がうみだす新しい社会文化とのかかわりあいにおいて、「万国博覧会」との共存のなかにあるのではないだろうか。今後この点についても、深く追求していきたい。

46 「経済史」における発展段階論的視点

資料・参考文献一覧

資料

1. 英国議会資料 (*British Parliamentary Papers*)

①手織工に関する王立委員会報告書

1840 (43-I) XXIII. Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers, Pt.II.

1840 (217) XXIV. Report from the Royal Commission on Hand-Loom Weavers, Pt.IV.

②教育に関する報告書

1852-53 (1692) XC. Report and Tables on Education, England and Wales.

2. トマス・アーノルドに関する資料

①ロンドン・タイムス (*The Times*)

“The Times”, 19 Dec. 1827 : *The Times Digital Archive*

② ‘Rugby School,-Use of The Classics’ in *The Quarterly Journal of Education*,1834.

Arnold,T., *The Miscellaneous Works of Thomas Arnold*, BiblioLife, 340-354.

③ Arthur Penrhyn Stanley M.A., Thomas Arnold D.D., *Life and Correspondence of Thomas Arnold, D.D.: late head master of Rugby school, and regius professor of modern history in the University of Oxford*, 1844.

参考文献

Aldrich,R. (1996). *Education for the Nation*, London and New York: Cassell.

Allen,R.C. (2009). *The British Industrial Revolution in Global Perspective*, Cambridge : Cambridge University Press.

Beale,C. (2011). *Born out of Wenlock: William Penny Brookes and the British origins of the modern Olympics*, Derby: The Derby Books Publishing.

Beatriz,G. (2012). *The Olympic Games and Cultural Policy*, New York: Routledge.

Behringer,W.(2012) *Kulturgeschichte des Sports. Vom antiken Olympia bis ins 21. Jahrhundert*, München : Verlag C.H.Beck oHG. ; 高木葉子訳『スポーツの文化史－古代オリンピックから21世紀まで－』法政大学出版会, 2019年.

Boykoff,J. (2016). *Power Games : a Political History of the Olympics*, London and New York: Verso.; 中島由華訳『オリンピック秘史: 120年の覇権と権力』早川書房, 2018年.

Bythell, D. (1969). *The handloom weavers: a study in the English cotton industry*

- during the industrial revolution*, Cambridge :Cambridge University Press.
- Cain, P.J and A.G. Hopkins (1993) . *British imperialism*, Longman. ; 竹内幸雄・秋田茂訳『ジェントルマン資本主義と大英帝国』岩波書店, 1994年.
- Girginov,V and J.Parry (2005). *The Olympic Games explained : a student guide to the evolution of the modern Olympic Games*, London and New York: Routledge. ; 舛本直文訳『オリンピックのすべて：古代の理想から現代の諸問題まで』大修館店, 2008年.
- Horne.J and G.Whannel (2020). *Understanding the Olympics*, Oxford and New York: Routledge.
- Hudson, P. (1983). 'From manor to mill: the West Riding in transition' in M. Berg, P. Hudson and M. Sonenscher eds., *Manufacture in town and country before the factory*, Cambridge:Cambridge University Press, 1983.
- Hudson, P. (1991). 'Landholding and the organization of textile manufacture in Yorkshire rural townships, c.1660-1810', in M. Bers ed., *Markets and manufacture in early industrial Europe*, London and New York:Routledge.
- Hudson, P. (1992). *The Industrial Revolution*, London : Edward Arnold Limited.
- Hudson, P. (2004). 'Industrial organization and structure', in R. Floud and P. Johnson, eds., *Cambridge economic history of modern Britain*, vol.1, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lucas,J.A. (1962). *Baron Pierre de Coubertin and formative years of the modern international Olympic movement 1883-1896*, UMI.
- Lucas,J.A. (1992). *Future of the Olympic Games*, Human Kinetics Books.
- MacAloon, J.J. (2008). *This Great Symbol: Pierre de Coubertin and the Origins of the Modern Olympic Games*, London and New York: Routledge.
- Mokyr, J. (2002). *The Gifts of Athena: Historical Origins of the Knowledge Economy*, Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Mokyr, J. (2004). 'According for the industrial revolution', in R. Floud and P. Johnson, eds., *Cambridge economic history of modern Britain*, vol.1, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mitch, D. (2004). 'Education and skill of British labour force', in R. Floud and P. Johnson, eds., *Cambridge economic history of modern Britain*, vol.1, Cambridge: Cambridge University Press.
- Polley,M. (2011). *The British Olympics: Britain's Olympic heritage 1612-2012*, Swindon:

English Heritage.

Timmins,G. (1996). *The last shift :the decline of handloom weaving in nineteenth-century Lancashire*, Manchester: Manchester University Press.

大田直子 (1998) 「もう一つの教育行政制度原理～英国中産階級のための教育行政制度構想～」『人文学報』第33号, 39-64頁.

大塚久雄 (2001) 『欧州経済史』岩波書店.

小澤周三・影山昇・小澤滋子・今井重孝 (1993) 『教育思想史』有斐閣.

小野塚知二 (2001) 『クラフツ的規制の起源－19世紀イギリス機械産業』有斐閣.

川島昭夫 (2003) 「工業化時代の生活と文化」村岡健次・北川稔『イギリス近代史』ミネルヴァ書房.

河村貞江 (2003) 「『帝国主義』と大衆社会の到来」村岡健次・北川稔『イギリス近代史』ミネルヴァ書房.

君塚直隆 (2011) 「貴族政治の黄金時代」秋田茂・木畑洋一編著『近代イギリスの歴史』ミネルヴァ書房.

清瀧仁志 (2001a) 「トマス・アーノルドにおける教会と国民統合」『法制研究』第67巻第3号, 49-93頁.

清瀧仁志 (2001b) 「トマス・アーノルドにおける教育と国民統合」『政治研究』第48巻第1号, 1-29頁.

清瀧仁志 (2004) 『近代化と国民統合：イギリス政治の伝統と改革』木鐸社.

国際オリンピック委員会『オリンピック憲章 (Olympic Charter)』2020年度版

重富公生 (2011) 『産業のパクス・ブリタニカ－1851年ロンドン万国博覧会の世界－』勁草書房.

重富公生 (2012) 「1851年ロンドン万国博覧会と労働者」『国民経済雑誌』第206巻第5号, 33-47頁.

鈴木秀人 (2004) 「『トム・ブラウンの学校生活(1857)』の再検討：トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料としての可能性」『東京学芸大学紀要』56巻, 3643-53頁.

鈴木秀人 (2020) 「パブリックスクールにおける『スポーツ』の概念の創造」『現代スポーツ評論』第42号, 72-81頁.

武田薫 (2019) 『増補改訂 オリンピック全大会：人と時代と夢の物語』朝日新聞出版.

土屋靖明 (2013) 「クーベルタン男爵の原点としての英国パブリックスクール・ラグビー校校長のトマス＝アーノルド博士の指導者像－トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの

- 学校生活』(1857年)とバートランド＝ラッセル卿『教育論』(1926年)とに着目して－』『教育思想』第40巻, 27-36頁.
- 土屋靖明(2015)「トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について－トマス＝アーノルド校長の姿勢にも着目して－」『滋賀短期大学研究紀要』第40号, 23-36頁.
- 寺本敬子(2017)『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』思文閣出版.
- 東京文化資源会議編(2016)『TOKYO1/4と考える オリンピック文化プログラム－2016から未来へ』勉誠出版.
- 橋場弦(2016)「古代オリンピック：ギリシア人の祝祭と身体」橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』山川出版社.
- 松村昌家(2014)『大英帝国博覧会の歴史－ロンドン・マンチェスター二都物語－』ミネルヴァ書房.
- 眞壁宏幹(2016)『西洋教育思想史』慶応義塾大学出版会.
- 水田大紀(2011)「近代イギリス官僚制度改革史再考：調査委員会と官僚たちの同床異夢」『史林』第94巻第6号, 847-873頁.
- 村岡健次(1980)『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房.
- 村田奈々子(2016)「近代オリンピックのはじまり－普遍的理念とナショナリズムのせめぎあい」橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』山川出版社.
- 村田奈々子(2020)「近代ギリシアとオリンピック」『歴史と地理』第263巻第732号, 65-68頁.
- 和田浩一(2007)「ピエール・ド・クーベルタン『1896年のオリンピック競技会』」『研究紀要』第48巻, 89-108頁.
- 和田剛志(2016)「個を生かす集団づくりの再考－トマス・アーノルドの実践に着目して－」『ラグビーフォーラム』第9巻, 37-42頁.